

第2章 大野市の歴史文化の総合的把握

第1節 自然環境

1. 位置

本市は福井県東部に位置し、加越山地・越前中央山地・越美山地と、南北約9km、東西約7kmの大野盆地より形成されています。南北・東西とも約38kmある市域の面積は県内最大の872.43km²で、その約87%は山林となっています。また、本市は、西は福井市・今立郡池田町に、北は勝山市・石川県白山市に、東と南は岐阜県高山市・同県郡上市・同県関市・同県本巣市・同県揖斐郡揖斐川町に、県内外の多くの自治体と接しており、古くからこれら隣接する地域とさまざまな交流が行われています。



図5 大野市の位置図（国土数値情報「行政区域」、基盤地図情報を使用）

2. 地形

大野盆地の北と東は加越山地、西は越前中央山地、南は越美山地に接し、火山性台地や河岸段丘、谷底低地、扇状地、崖錐、氾濫原などがあります。

本市には九頭竜川・真名川・清滝川・赤根川の4河川が盆地内を並行して北流し、そのうち九頭竜川は岐阜県境を源としています。九頭竜川水系は上流部で九頭竜峡などの峡谷、盆地内で扇状地や河岸段丘、低湿地を形成しています。特に赤根川流域の牛ヶ原は湿地帯となっており、古くから水田耕作が営まれた地で、条里制（古代から中世後期の土地区画制度）による区画がなされていた地として知られています。また、盆地北東部の塚原野台地は、経ヶ岳の火山活動により形成された国内有数の火山泥流地形ですが、戦後の開発によりその原型は失われつつあります。

清滝川が形成する扇状地の先端には、大野市街地が展開しています。大野市街地には豊富な湧水「清水」が多く点在し、人々の生活を支えてきました。高度経済成長期以降、生活様式の変化や工業用の地下水汲み上げなどにより湧水量が減少しており、対策が課題となっています。

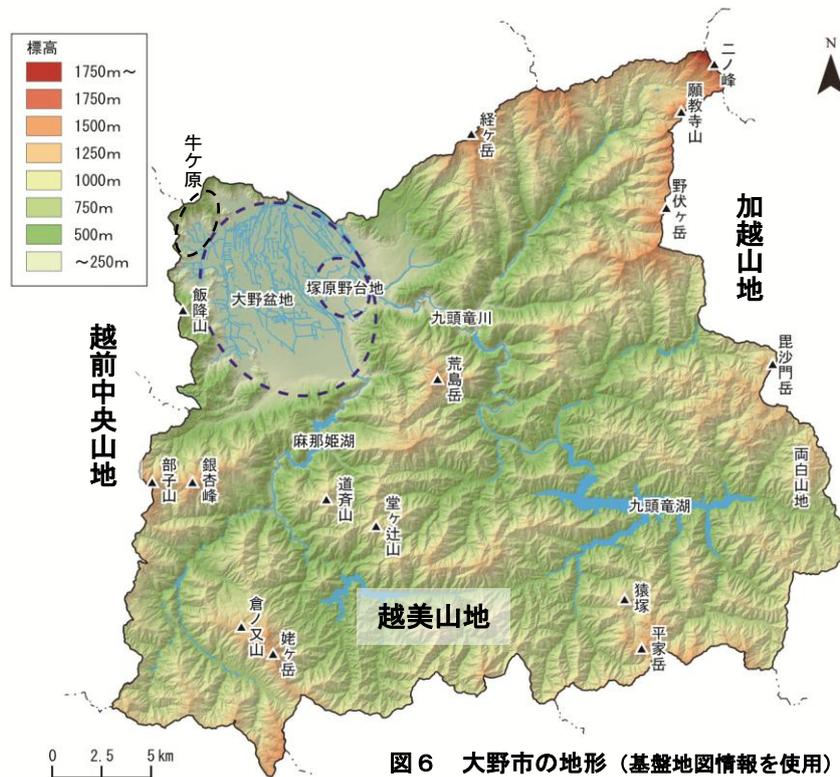


図6 大野市の地形（基盤地図情報を使用）

3. 水系

(1) 河川

本市には、九頭竜川・真名川・清滝川・赤根川の4河川が盆地内を並行して北流しています。また、私たちの先達は4河川を灌漑用水の取水源として、多くの用水路を整備しました。盆地内の豊富な水は、盆地内を豊穡な沃野としました。



図7 水系図（国土数値情報「河川」、基盤地図情報を使用）

(2) 清水しょうず

豊富な降水は地下水となり、各所に湧出しています。大野では湧水のことを「清水」と呼び、親しんできました。清水には、古くは奈良時代からのいわれを持つものもあり、人々に大切に利用されてきたことが分かります。清水を中心とした人々の生活の営みは、本市の文化を構成する要素の一つです。

表1 清水の一覧

清水名	所在地	清水名	所在地	清水名	所在地
御清水	泉町	木本薬師堂の霊泉	木本	阿難祖地頭方の清水	阿難祖地頭方
本願清水	糸魚町	殿様清水	右近次郎	山王神社の堀	日吉町
新堀清水	泉町	化物清水跡	右近次郎	弥生公園の清水跡	弥生町
お馬屋池	城町	こせき清水	泉町	篠座神社の御霊泉	篠座町
義景清水	泉町	中荒井の清水	中荒井	坂戸の白水	牛ヶ原
中野清水	中野	みくら清水	犬山	伊月の湧水	伊月
馬清水	篠座町	ふくべ清水	春日	蝶の水	東市布
上荒井清水	上荒井	存実の清水	八町		

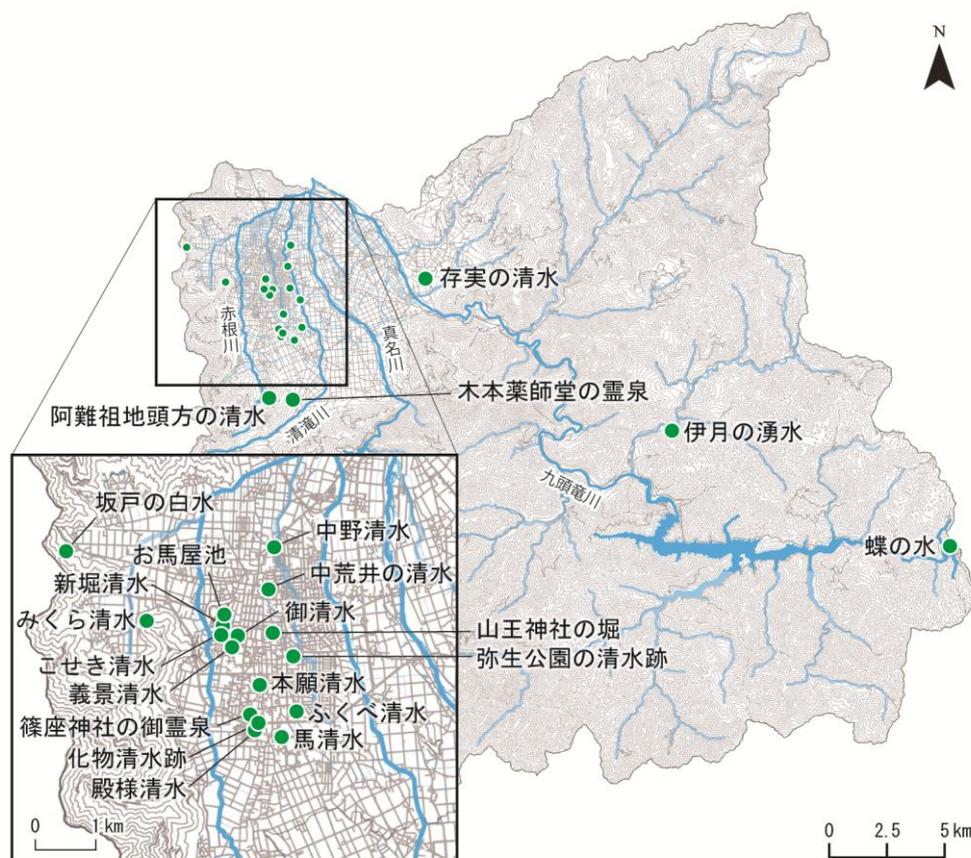


図8 清水の分布図（基盤地図情報を使用）※個人情報に関わるものは分布図には表示していません。

4. 気候

福井県東部の内陸部に位置する本市は日本海側気候に属し、地形や季節風の影響により冷涼で降雪量が多い北陸山地型の気候となっています。このため、全域が特別豪雪地帯に指定されており、平成30年（2018）2月の記録として、降雪量は九頭竜くずりゅうで301 cm、大野で177 cmとなっています。特に九頭竜での降雪量は、福井地方気象台が同地の計測を始めた昭和57年（1982）以降最多を記録しました。

平成29年（2017）の降雪で国指定重要文化財「旧橋本家住宅」（上庄地区）の茅葺屋根が崩落した事

例からも、気候が文化財の保存に大きく影響することがわかります。

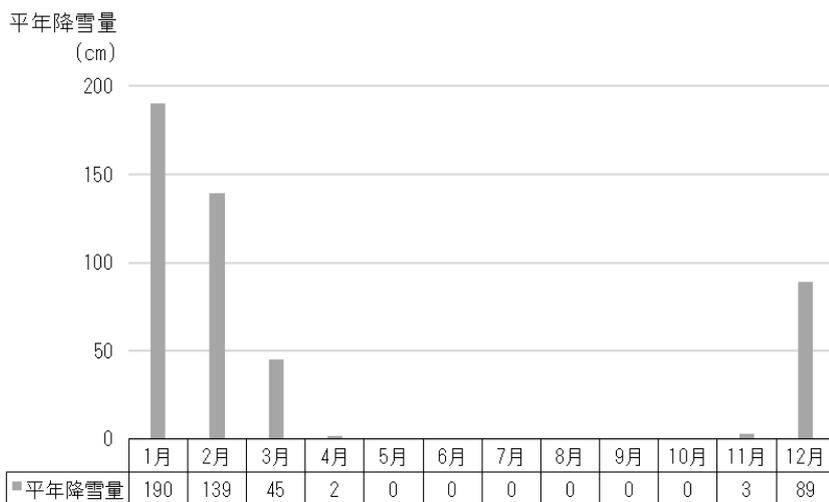


写真1 旧橋本家住宅の雪下ろしの様子

図9-1 大野市の降雪量
(気象庁・過去の気象データ「大野」より作成、平年値は1991～2020のデータ)

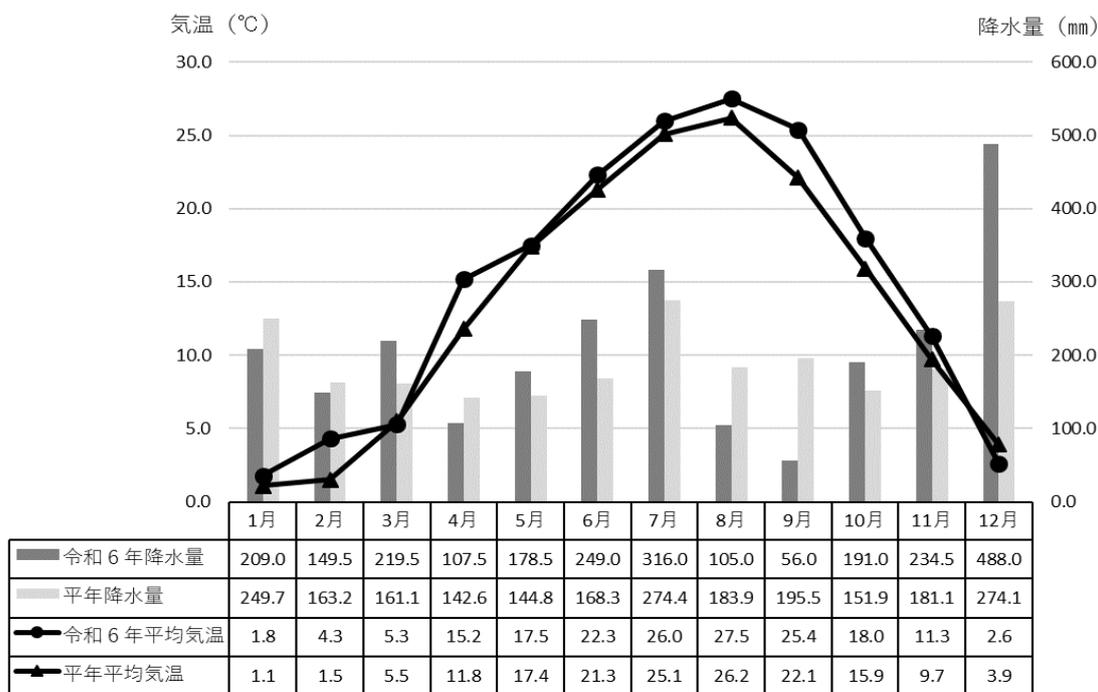


図9-2 大野市の降水量・平均気温 (気象庁・過去の気象データ「大野」より作成、平年値は1991～2020のデータ)

5. 植生

本市は、標高約 2,080mの三ノ峰避難小屋付近から標高 150～250mの大野盆地まで、約 1,900mの標高差を持ち、わが国に自生する維管束植物約 5,300 種のうち 32%が生育しています。シラカシやコウゾなどの常緑広葉樹林、ミズナラやブナ、ケヤキなどの夏緑広葉樹林、山地のオオシラビソなどの亜高山針葉樹林、キハダなどの落葉広葉樹林、オウレンなどの多年生草本など、幅広い垂直分布の植物相が認められ、植物学上重要な地域となっています。

これら本市の豊かな植物相は、古代より建築資材や燃料、食用、薬用、^{なりわい}生業などさまざまな分野で利

活用され、歴史文化形成の重要な構成要素となっています。また、白山国立公園と奥越高原県立自然公園への指定や、水源涵養林として保護管理されてきました。

なかでも、「専福寺の大ケヤキ」(上庄地区)は国指定天然記念物として、「白山神社のカツラ」(五箇地区)や「下打波のトチノキ・ケヤキ・イタヤカエデ群生林」(五箇地区)は県指定天然記念物として、「平家平のトチノキ」(西谷地区)や「春日神社の大いちよう」(阪谷地区)、「桃木峠の大杉」(阪谷・五箇地区)、「義雲杉」(上庄地区)、「八幡神社の大杉」(乾側地区)は市指定天然記念物として、それぞれ指定されています。未指定文化財としては、「宝慶寺のモミ」(上庄地区)や「弘法杉」(上庄地区)、「上小池のクリ」(五箇地区)などの巨樹があります。



図10 記念物樹などの分布(背景に基盤地図情報を使用)

しかしながら近年は、帰化植物の繁殖域の拡大や開発・乱獲による在来植物の生態系の破壊などが進んできていることから、地域にとって重要な植生を本市の文化を育んできた基礎の一つとして、適切に保全していく必要があります。

6. 動物

本市には、国指定特別天然記念物の(ニホン)カモシカや、国指定天然記念物のイヌワシやヤマネをはじめとした多様な動物が生息しています。また、国指定天然記念物「本願清水イトヨ生息地」(大野地区)は淡水型イトヨの生息域の南限として、国指定天然記念物「アラレガコ生息地」(富田・阪谷地区)は九頭竜川阪谷橋より下流域がアラレガコ生息地として、それぞれ地域を定めて国天然記念物に指定されています。

福井県レッドデータブックによると、オジロワシは絶滅の危機に瀕している「県域絶滅危惧Ⅰ類」に、ヤマネは生息・生育条件の変化によって絶滅危惧に移行する可能性のある「県域準絶滅危惧」に、それぞれ選定されています。個体数の減少理由として、いずれも都市化や開発行為に伴う環境改変、人口減少に伴う里地里山の荒廃などによる生息環境の悪化、餌となる魚類と昆虫類の個体数の減少が考えられます(大野市に生息する動物については資料編9を参照)。



写真2 本願清水イトヨ生息地（天然記念物）



写真3 アラレガコ生息地（天然記念物）

第2節 古環境

1. 地質

本市は、^{きょうがだけ}経ヶ岳の火山活動に由来する火山性堆積物と、河川が運搬した堆積物が埋積して形成されました。盆地の堆積物の層厚は深い所で120m以上に達し、豊富な地下水を有しています。このような多様な地形を呈する^{てい}大野市内には、古・中・新生代の地層や火成岩体、鉱床などが複雑に分布しています。

2. 化石

本市は^{せいなんにほんないたい}西南日本内帯の東部に位置しており、白亜紀後期より前の地体構造区分で見ると、北から南へ飛騨帯、飛騨外縁帯、美濃帯の順で帯状に配列しています。

飛騨帯は、飛騨片麻岩類（先カンブリア時代）、^{くずりゅう}九頭竜層群・手取層群（ジュラ紀中期～白亜紀前期）から構成されています。九頭竜層群・手取層群は泥岩、砂岩、礫岩から構成され、アンモナイトや恐竜、陸生植物などの化石が発見されています。^{しもやま いざみ}下山（和泉地区）は、明治15年（1882）に日本で最初にジュラ紀のアンモナイト化石が発見された場所として有名です。^{しもはんぼら}下半原（和泉地区）では、平成8年（1996）に国内最古級のティラノサウルス類の歯化石が発見され、その起源を解明する上で重要な産地として注目されています。

飛騨外縁帯は、シルル紀から白亜紀後期より前の主に粘板岩、砂岩、礫岩、凝灰岩、石灰岩、千枚岩、緑色岩、結晶片岩から構成されています。伊勢（和泉地区）に分布する石灰岩層は、全国的に見て珍しいデボン紀を示す三葉虫やハチノスサンゴなどの化石が産出することで知られています。

美濃帯は、主に泥岩、砂岩、チャート、緑色岩、メラングェから構成されています。小沢（^{にしただに}西谷地区）に分布する赤色チャート層からは三畳紀中期～ジュラ紀前期を示す海洋プランクトンの放射虫化石が報告されています。

白亜紀後期以後は地体構造区分に影響されず、足羽層群相当層・^{おもだにりゅうもんがん}面谷流紋岩類（白亜紀後期）、糸生層安山岩類（中新世）、新期安山岩類（鮮新世～更新世）などが分布しています。

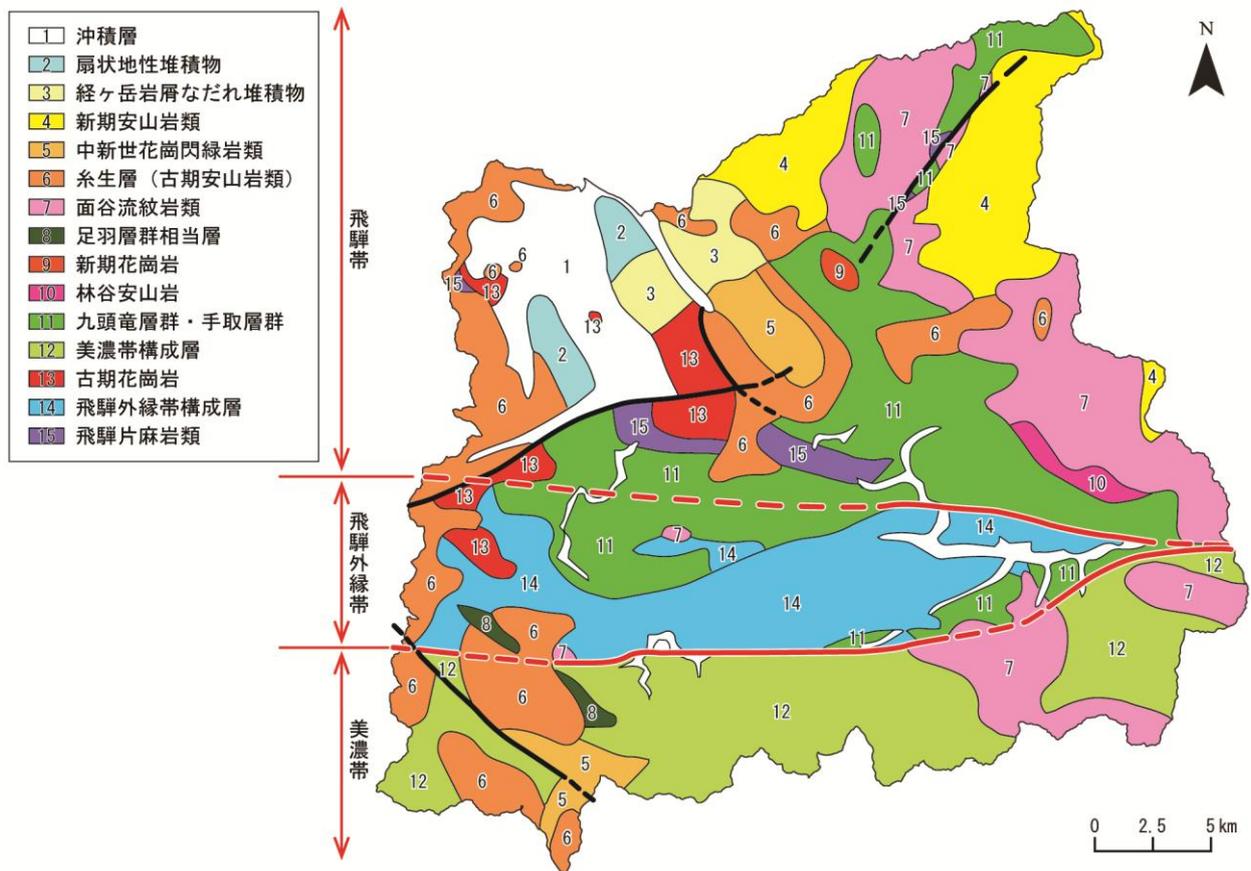


図 11 大野市の地質概略図（基盤地図情報を使用、福井県(2010)を簡略化して加筆）

第3節 歴史環境

1. 歴史的変遷

(1) 歴史前夜

和泉地区には、古生代と中生代の貴重な化石を産出する地層が広く分布しており、約3億年に渡る地球の歴史が眠っています（詳細は資料編10を参照）。

古生代（約5億4100万年前～約2億130万年前）の化石は、飛驒外縁帯から産出し、三葉虫やフズリナ、サンゴ、ウミユリ、腕足類などの海の生き物の化石が発見されています。

中生代ジュラ紀（約2億130万年前～約1億4500万年前）の化石は、九頭竜層群から産出し、ベレムナイトやイノセラムスなど海の生き物の化石が発見されています。また、下山（和泉地区）の谷山谷で明治15年（1882）に国内初のジュラ紀のアンモナイト化石が発見され、本市とチベットの2カ所でのみ発見例のない「シュードニューケニセラス・ヨコヤマイ」と名付けられたジュラ紀のアンモナイト化石の産出地となっています。本市はジュラ紀中期（約1億6600万年前）からジュラ紀後期（約1億6000万年前）にかけてのさまざまなアンモナイトの産出が知られるようになり、現在ではアジアの重要なアンモナイト研究の拠点として国際的に評価されています。

中生代白亜紀（約1億4500万年前～約6600万年前）の手取層群から、恐竜や貝、シダの葉など陸上に生息した動植物の化石が産出しています。平成8年（1996）には当時世界最古級とされたティラノサウルス類の歯の化石が、平成21年（2009）にはテタヌラ類（獣脚類）の歯の化石も発見され、北陸の重要な恐竜化石産出地として注目を浴びています。

また、令和3年（2021）には手取層群から国内最古級の哺乳類の歯が付いた顎骨の化石、令和5年（2023）

には川合トンネルからアンモナイト（ペリスフィンクテス科、クラナオスフィンクテス亜属）の化石、令和6年（2024）には九頭竜層群からプラヴァムシウム（二枚貝）の化石が発表されました。これらは新種の可能性もあり、研究が進められています。

このように本市は明治時代から現在に至るまで地質と化石を対象とした調査研究を行っています。日本の土台が大陸縁辺に存在していた時期の海洋と陸上の歴史をひもとく上で本市は重要な場所と言えます。

(2) 原始(縄文時代から古墳時代)

① 人々の活動のはじまり(縄文時代)

本市で確認できる人々の活動の始まりは縄文時代草創期（約12,000年前）です。市域には33カ所の縄文時代の遺跡の所在が明らかになっており、出土した土器などの特徴から、北陸地方はもとより、関西地方や東海地方、信越地方などとも交流を持っていたことが推定されています。

縄文時代の遺跡は、九頭竜川や真名川など、主要な河川の段丘上に形成される傾向が認められ、縄文時代を通して複数の集落が営まれていたことが分かっています。

大野市内の縄文時代の遺跡調査は、戦前の上田三平氏による温見遺跡（西谷地区）の現地踏査に始まります。この後、小谷堂遺跡（和泉地区）が昭和41年（1966）に福井県考古学研究会により発掘調査され、県内で最初に縄文時代の竪穴住居跡が発掘された事例として知られています。また、角野前坂遺跡（和泉地区）は、昭和44年（1969）、同46年（1971）に若狭考古学研究会が発掘調査を行い、複式炉を持つ竪穴住居跡5棟を発掘するなど、県内の縄文集落研究の先駆的事例となっています。

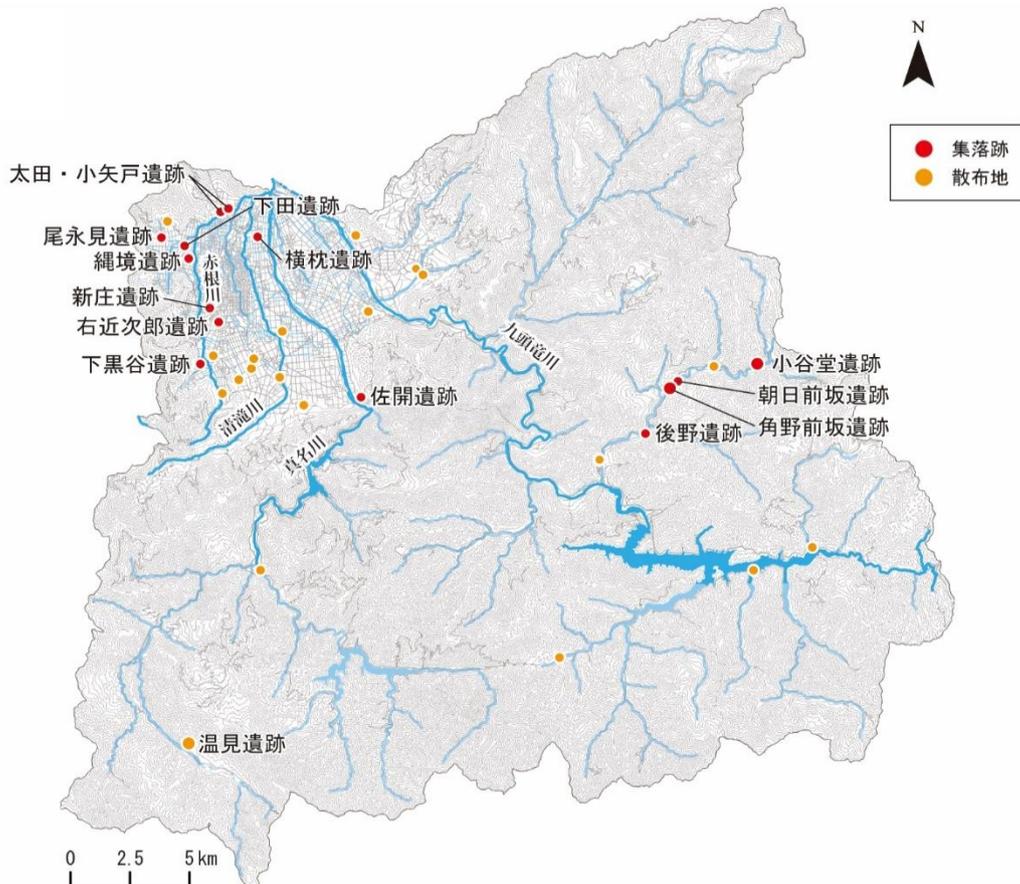


図12 縄文時代の遺跡分布（背景図に基盤地図情報を使用）

②人々の交流の発展(弥生時代)

市域には 21 カ所の弥生時代の遺跡の所在が明らかになっており、内訳としては、集落跡が 6 遺跡、土器などの遺物を確認した遺物散布地が 15 遺跡となっています。

特に、中部縦貫自動車道建設に伴う発掘調査の結果により、弥生時代の遺跡は、従来の赤根川流域以外に真名川と清滝川の流域でも所在が確認されるようになりました。また平成 10 年（1998）、同 11 年（1999）に、圃場整備事業に伴い実施した右近次郎西川遺跡（小山地区）の発掘調査では、奥越地域では初となる、緑色凝灰岩を石材とする管玉を中心とした玉づくり跡を発見しました。

さらに、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡では、本市への鉄器文化の流入を示す鉄鏃などの鉄器が出土した上舌遺跡（小山地区）や、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて近江地方とのつながりを強く示す犬山遺跡（乾側地区）など、県内における重要な発見が続きました。

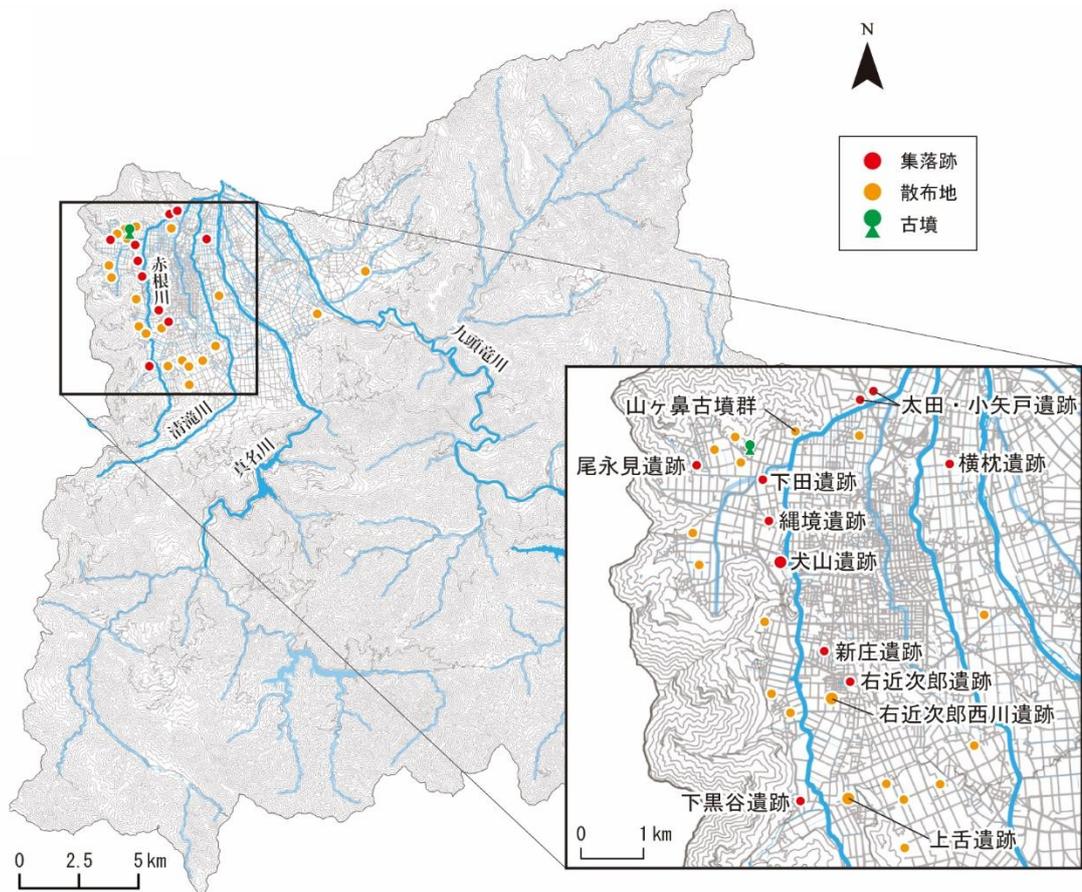


図 13 弥生時代の遺跡分布（背景図に基盤地図情報を使用）

③有力首長の台頭(古墳時代)

本市の古墳は、赤根川左岸の丘陵上に多く、この他にも赤根川右岸、真名川と清滝川の扇頂部にも分布が認められます。昭和 53 年（1978）に発掘調査を行った山ヶ鼻 6 号墳（下庄・乾側地区）は全長 36m の前方後円墳で、埋葬施設に割竹型木棺を持っていました。二つ割りにした丸太を削り抜いて作る割竹型木棺は特権階級の人々のために考案されたと推測されており、当地の首長墓と考えられています。なお、同古墳に続く首長墓の流れは、盆地内最大の円墳である御茶ヶ端古墳群（下庄地区）、さらに下舌三ツ塚古墳群（小山地区）に続くと考えられています。

古墳時代の集落遺跡として、現在、福井県立大野高等学校の敷地となっている赤根川右岸の新庄遺跡（大野地区）があります。同遺跡の発掘調査では、掘立柱建物 19 棟が確認されており、建物の方位などからこれら建物群は 3 時期に分けられ、各時期 10 棟前後の建物で構成されていたと推定されています。

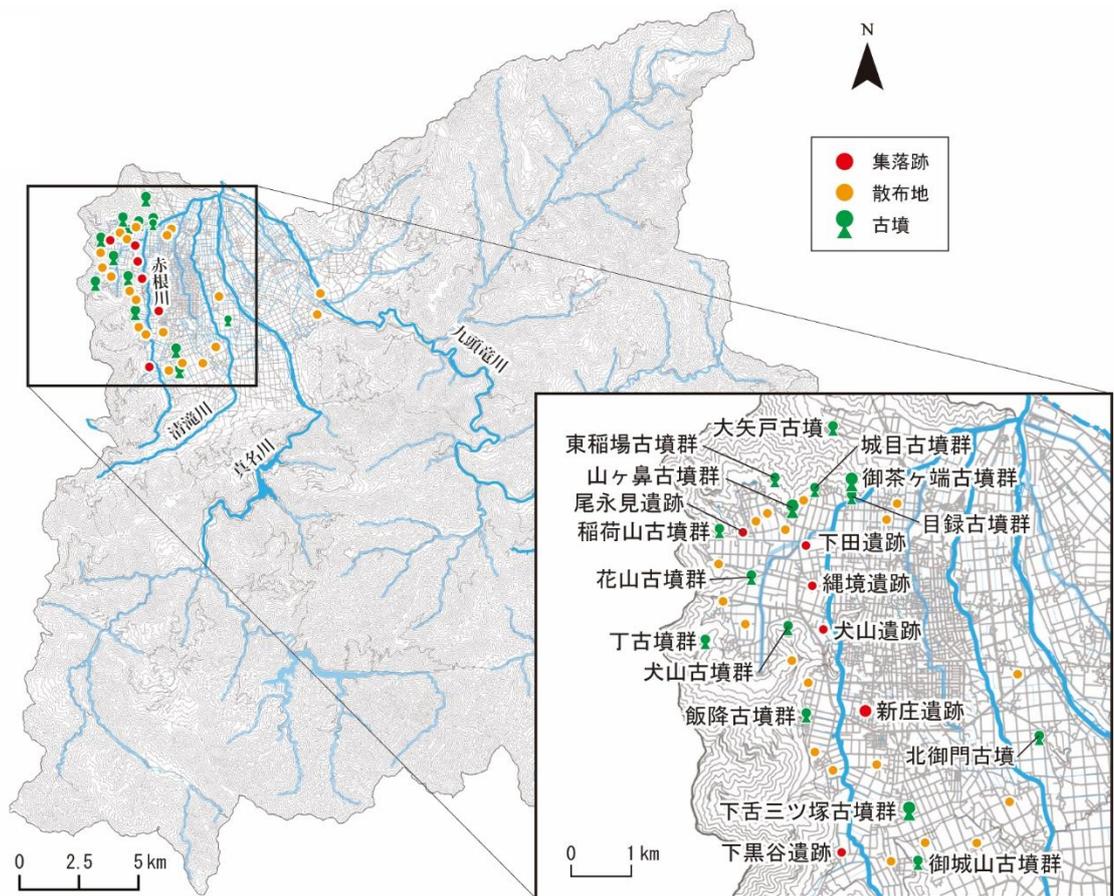


図 14 古墳時代の遺跡分布（背景図に基盤地図情報を使用）

(3) 古代(奈良・平安時代)

① 律令制と大野

奈良時代の大野は、天平元年（729）銘の平城京跡出土木簡から「越前国大野郡」として位置付けられていたと考えられています。また、長岡京跡出土木簡には、「上郷」、「大山郷」、「大沼郷」という地名があることから、律令制による郡と郷が大野に存在していたことが判明しています。さらに牛ヶ原（乾側地区）と犬山（乾側地区）には、条里制に基づく地割や地名が確認されています。

平安時代になり、中央の有力寺院などによる荘園制が発達していく中、大野では、牛ヶ原（乾側地区）を中心に、醍醐寺子院円光院の所領である「牛原荘」が成立しました。白河院政期（1086～1129）には牛原荘のみであった荘園も、鳥羽院政期（1129～56）には小山荘や泉荘などその数を増やしており、郡内の荘園化が急速に進んだことが分かります。一方、牛原荘が成立して間もなく、国衙領（公領）を増大したい歴代の越前国司と、本家として寺領の安定を目指す醍醐寺円光院との間で牛原荘の範囲（四至）争いが起きました。醍醐寺円光院側の主張が認められるまでのおよそ 50 年の間に繰り広げられた国司の執拗な牛原荘の否定や、荘園と公領による土地の重層支配（荘園公領制）から、古代の律令制による支配構造の終焉を確認することができます。

化形成において重要な要素となっていました。

白山信仰に関わるさまざまな痕跡は、篠座神社（大野地区）など白山を開山した泰澄による開基の伝承を持つ寺社や、泰澄が悪龍を封じたとする「刈込池」（五箇地区）、泰澄が挿した箸が成長したと伝わる県指定天然記念物「白山神社のカツラ」（五箇地区）など、市内の各地で認めることができます。また、経ヶ岳は白山に向けて経典を奉納（埋納）していたことが名前の由来とされており、飯降山の山頂の石壇は白山を礼拝するためのものと言われています。

(4) 中世(鎌倉～安土桃山時代)

① 律令国家から武家社会へ

本市には、源氏と平氏にゆかりのある場所がいくつかあります。巢原（西谷地区）には県指定無形民俗文化財の「平家踊」が今に伝わっており、朝日（和泉地区）に伝わった「青葉の笛」は源頼朝の兄である源義平が残したものとされています。また、平家の落人が隠れ住んだと言われる平家平（西谷地区）などの地名の起源は、源平の争乱によるとされています。

源頼朝による武家政権が鎌倉に誕生すると、大野の社会も大きな変化が生じることとなりました。すなわち、大野には地頭や荘園領主などの諸権力による支配が存在し、民衆間にさまざまな緊張を強いていました。その一端は、牛原荘において地頭又代官と一族が、牛原荘の荘官や百姓らによって殺される事件に表れることとなりました。

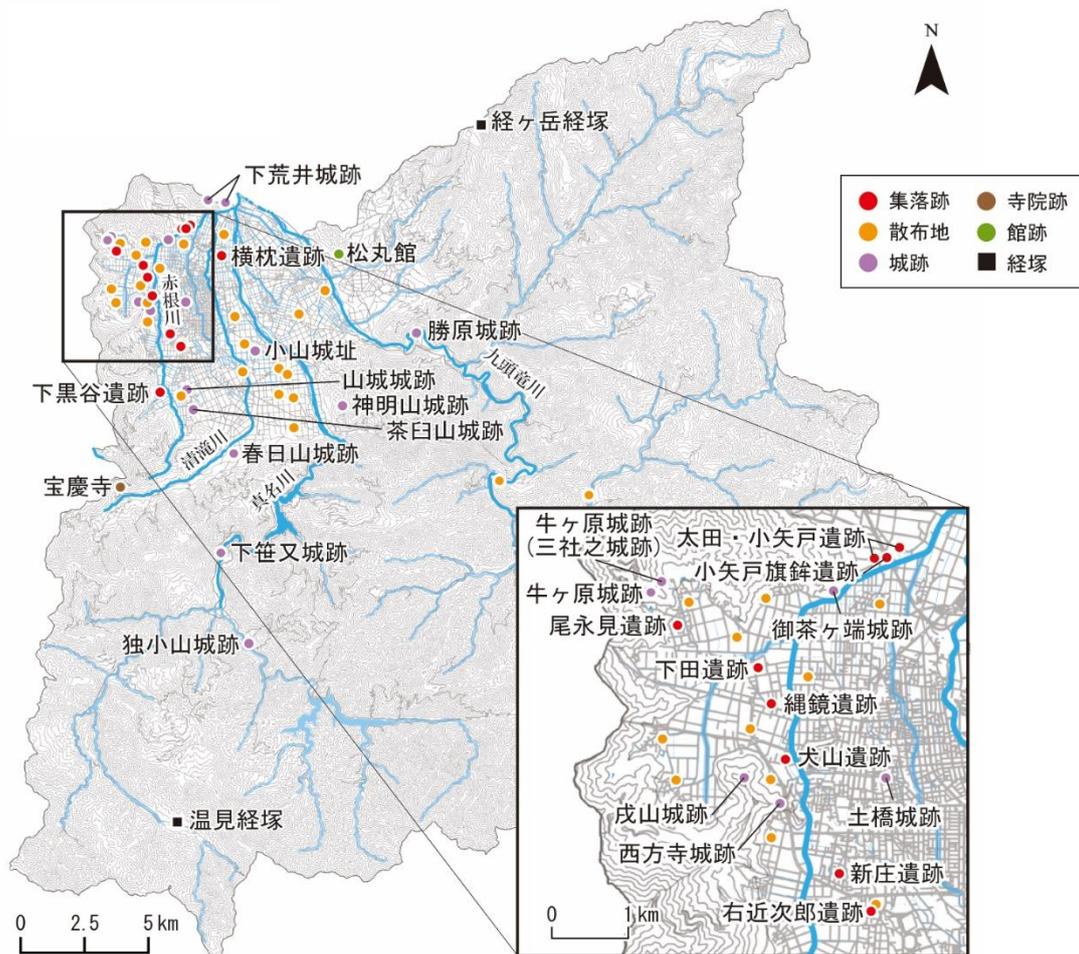


図 17 中世の遺跡分布（背景図に基盤地図情報を使用）

②戦乱の時代と城郭群の形成

鎌倉幕府に陰りが見え始めると、後醍醐天皇を中心に倒幕の動きが活発化しました。大野でも平泉寺衆徒が反幕府の兵を挙げ、牛ヶ原（乾側地区）の地頭の淡河右京亮時治を攻め、赤根川の「鞍ヶ淵」（下庄地区）で自害させた件は、『太平記』を通して広く知られています。

鎌倉幕府倒幕後の世情の混乱が収束に向かう中、足利一門の斯波高経が越前国の守護に任じられたことから、斯波氏が大野に影響を及ぼすこととなります。その一族により、大野盆地西部に位置する山に戌山城（乾側地区）を築城し、大野の支配を行うようになりました。亥山城（大野地区）とあわせ、義種系斯波氏による大野支配の軍事的・政治的拠点として機能しました。その後、斯波氏一族の中で発生した家督争いは、やがて応仁の乱の一因となりました。



図 18 中世期の城跡分布
(背景図(地形)に基盤地図情報を使用)

大野では戌山城（乾側地区）や亥山城（大野地区）、小山城（上庄地区）、将監城（五箇地区）などの山城が築城されたことが文献や遺構で判明しており、現在も堀跡などを確認することができます。

戦国の世に入ると斯波氏の力は衰え、代わって朝倉氏が越前全域を支配することとなり、大野も朝倉氏の支配下に入りました。朝倉氏は文明3年（1471）に越前の実質的な守護となり、同7年（1475）には越前支配を確立しました。しかし、それまで大野を支配していた斯波氏や甲斐氏、二宮氏らは、朝倉氏からの越前支配権奪回を目指して幾度の反撃を試みています。朝倉氏は本拠地を一乗谷（福井市）に構え、領内の重要な地には一族を置いていました。交通・軍事上の重要拠点であった大野には郡司が置かれ、朝倉孝景の弟・光玖を配置しました。その後、郡司は朝倉景高、景鏡へと引き継がれています。

尾張の戦国大名、織田信長が美濃より天下統一を目指して越前に侵攻すると、朝倉氏や一向衆との間で激戦を交わすこととなりました。結果、越前の争乱は信長の勝利で幕を閉じ、大野は信長の家臣である金森長近が治めることとなりました。

③戦乱期の民衆の生活

絶え間ない戦乱が続いたこの時期、西日本を中心に、農村の自治組織である「惣村」が形成されていきます。惣村では寄合によって掟が定められ、入会地や灌漑用水などの共同管理や年貢納入を請け負っていました。本市では具体的な「惣村」の動きを示す史料は確認されていませんが、下打波（五箇地区）や大月（阪谷地区）などに惣村が形成されていたと推察される痕跡が認められます。

④多様な信仰形態の始まりと民衆への影響

鎌倉時代に入り白山信仰の拠点である平泉寺が地域の有力寺院として成長していく中、後に永平寺を拠点に曹洞宗を広めた道元が大野の禪師峰（下庄地区）で、弟子の寂円が銀杏峰（上庄地区）で活動したと言われており、さらに北陸地方に強大な勢力を形成することとなる浄土真宗も穴馬谷（和泉地区）

で布教活動を始めていました。これは、浄土真宗が多く信仰されている美濃と近江に近接する大野の地理的特性が大きく影響を及ぼしていると考えられます。

戦国時代には、浄土真宗が多く^の信者を得て巨大な勢力を形成し、在地領主と朝倉氏に対し一向一揆を起こすなど武力で対抗するようになりました。

⑤城下町の形成

長近は亀山（大野地区）に大野城（大野地区）を築くとともに、亀山の東側で城下町の建設を進めました。城下町を東西、南北各6筋の道により区画し、武家屋敷と町屋敷を配置しました。また、豊富な地下水を利用した城下の整備を進め、大野城の堀や池には湧水がたたえられ、城下町を南北に通る各街路には湧水を利用した上水路を設置しました。各屋敷の背中合わせの境には、「背割り水路」（大野地区）と呼ばれる生活排水用の下水路を設置しました。

このように現在の大野市街地の原型となる城下町の整備が進められ、今に至る大野繁栄の礎が誕生しました。



写真4 金森長近の銅像
(亀山山頂)



図19 大野町絵図（年不詳・大野市博物館蔵）

(5) 近世(江戸時代)

①土井氏の治政

江戸に幕府を開いた徳川家康は、次男の結城秀康^{ゆうき}を越前国に封じ、大野を含む越前国68万石を治めさせています。その後、寛永元年（1624）、5万石で大野藩が成立しました。

天和2年（1682）、大野藩主であった松平直明の明石（兵庫県）移封により、下野国足利^{しもつけのくにあしかが}（栃木県）から転封してきた土井氏が新たな大野藩主となり、以後、明治維新を迎えるまでの約190年間、大野は土井氏によって治められることとなりました。土井氏の治世の間、特に7代藩主の利忠^{としただ}は、幕末の動乱期の中で、藩校



写真5 明倫館の碑

「明倫館」(大野地区)の創設や藩内の人材育成、西洋医学の普及、蝦夷地開拓、地場産品の販路拡大、洋学振興などの諸政策を行い、藩の発展に努めました。これら^{としただ}利忠による藩政改革では、内山^{りょうきゆう}良休・^{りゅうすけ}隆佐の兄弟が尽力し、大野藩の財政再建に大きな功績を残しています。

②大火の記憶

大野市街地では、江戸時代中期から明治時代中期にかけて、大火が9回発生しました(詳細は資料編11を参照)。

このうち、城下町の広域が焼失する大火は6回発生しました。特に、安永4年(1775)の大火は江戸時代において大野城下最大級の火災であり、亀山の山頂部にあった大野城の本丸も焼失しました。これら江戸時代の火災による被害を受け、さまざまな防火対策がなされました。

一例を挙げると、棟割長屋には延焼を防ぐために袖壁を付けた他、角地の外壁に消火器を設置するなどしました。袖壁と消火器は、今では大野市街地の各所で認められる防火対策の景観となっています。

さらに、城下町の寺院と町家は初期消火用に「用心池」(大野地区)を設け、城下町を南北に走る道の中央に通っていた上水路は初期消火用水にもなりました。また、町屋敷の出火が武家屋敷地に延焼することを防ぐため、「本町と七間の角」から「曹源寺」までの区間の西側を「火除け地」として空き地としました。

特に、城下町南側からの出火は、^{あらしまおろし}荒島風と呼ばれた南風に煽られ大火になりやすいため、防火を目的に寺院と村の移転が行われました。一例を挙げると、現在、錦町にある浄勝寺はかつての金塚村(現在の天神町周辺)から風下の現在地に移転したものです。火災の火元になることが多かった野口村は移転し、現在の「新町」などになっています。

明治21年(1888)と明治32年(1899)の大火では、当時の大野市街地の広域が焼失し、大きな被害を受けました。

本市は、明治21年(1888)の大火を記念し、大火の発生した4月8日を「大火記念日」としています。毎年この日には、防火パレードを行うなど、市民の火災予防意識の醸成に努めています。明治32年(1899)の大火以降には、延焼を防ぐために六間通り(大野地区)と石灯籠小路(大野地区)を拡幅し、茅葺きから瓦葺き屋根に変更することを推奨しました。

このように、大火に悩まされてきた大野市街地ではさまざまな防火対策を講じており、市民一人一人に防火意識が浸透していると言えます。

(6)近現代(明治時代～平成時代)

①福井県の誕生と大野の発展

明治維新を迎えると、大野藩は明治4年(1871)7月に大野県となり、同年11月には福井県に編入されました。福井県はその後、^{あすわ}足羽県への改称(明治4年(1871))や^{あはれ}敦賀県への編入(明治6年(1873))、敦賀県の分割と石川県・滋賀県への編入(明治9年(1876))などの再編を経て、明治14年(1881)に嶺北・嶺南の合併によって今日の福井県が誕生しました。

明治時代の^{おおの}大野町には、^{ゆうしゅう}有終小学校(明治7年(1874))や区裁判所(明治10年(1877))、大野警察署(明治14年(1881))が



写真6 航空写真
(大野盆地などを北西から撮影)

置られました。一方、産業面では大野桑園会社や大野製糸合資会社が設立され、養蚕・製糸が盛んとなっていきます。また、麻・苧麻・蚊帳の生産や葉タバコなどの換金作物の栽培・生産、面谷（和泉地区）で銅山の開発が行われるようになりました。

この他にも乾田馬耕の普及など、近代農業の導入により収穫量が増大し、さらには新田野（大野地区）や木本原（上庄地区）などの開墾が進むなど、市内全体で活況が見られるようになりました。

②戦後から現代へ

戦後、本市には、九頭竜川水系に九頭竜ダムなどが作られ、ここで作られた貴重な電力は、わが国の高度経済成長を支えることとなりました。

本市の戦後の公共交通機関を見てみると、昭和35年（1960）に、それまで貨物駅であった南福井駅（福井市）を起点¹に、勝原駅（五箇地区）までの区間43.1kmをつなぐ「越美北線」が開業され、その後、昭和47年（1972）には九頭竜湖駅（和泉地区）までの10.2kmが延伸開業しました。同線は、開業以来、通勤や通学など重要な交通手段として利用されてきました。特に、平成16年（2004）の「平成16年7月福井豪雨」により福井市で橋脚が流失した際には、地域住民の強い要望により、九頭竜湖駅（和泉地区）から美山駅（福井市）までの区間は2カ月という短期間で復旧がなされており、地域の重要な交通機関であることが分かります。令和6年（2024）には北陸新幹線の金沢～敦賀駅が開業し、高規格鉄道網との接続による同線のさらなる誘客利用が期待されるところです。

また、モータリゼーションの発達により自動車道の整備も進み、特に近年は、中部縦貫自動車道で令和5年3月に大野IC～勝原IC間、10月に勝原IC～九頭竜IC間が開通し、さらなる岐阜県側への延伸工事による北陸圏・関東圏・中京圏を結ぶ広域ネットワークの構築に期待が持たれています。

③自然の厳しさと共に生きる大野

本市における自然災害としては、暴風雨・地震・降雪・洪水による災害が中心となっています（詳細は資料編11を参照）。

風水害では、昭和34年（1959）の伊勢湾台風や昭和36年（1961）の第2室戸台風、昭和40年（1965）の奥越豪雨が、また、雪害では、昭和38年（1963）や昭和56年（1981）、平成18年（2006）などの豪雪、さらに地震災害では、明治24年（1891）の濃尾地震や昭和23年（1948）の福井地震、昭和36年（1961）の北美濃地震などにより、人命や家屋などに被害が発生したことが知られています²。また、山地では山崩れや土砂崩れ、崖崩れなども発生しています。

また、上記の自然災害以外にも、火災などの人為的災害があります。豪雪地帯である本市では、いったん火災が発生した場合、積雪などによって消火活動が困難となる場合も多く、実際、昭和56年（1981）には豪雪下で火災が多発し、火災非常事態宣言が発表されるなどしています。

下黒谷（小山地区）には、雪崩防護のための高さ15.5m、全長約300mにも及ぶ防雪防護擁壁（黒谷の防雪壁）があります。防雪防護擁壁（黒谷の防雪壁）には、永遠の無事故と安全を願った壁画が描かれています。最近では地区ごとの自主防災組織の立ち上げにより、防災意識や能力が高まっています。

¹ 昭和62年（1987）、越前花堂駅に起点を変更。

² 「大野市地域防災計画資料編」 大野市

2. 各地区の概要

(1) 大野地区

①地勢

大野市街地が広がっており、その南側には木本扇状地の地下を流れた伏流水が地表に表れて、本願清水や義景清水、御清水などいくつもの湧水池を作っています。

②地区名の由来

地区名の由来は、「大沼の転化」と「大きな野原があった」の二説があります。『大野市史』地区編では、かつて「大野郡大沼郷」としていましたが、金森長近によって城下町が建設されたことにより大沼郷が郡の中心的な存在となったため、郡名を使い「大野町」と称するようになったと考察しています。

③略史

古代から中世初期にかけての大野地方の政治・経済の中心は、都の寺社や貴族の荘園が所在した小山地区と乾側地区にあり、当地区には数村があったのみでした。中世中期に、今の日吉神社の場所に土橋城が築かれると、周囲に小規模の市街地（城下町）が形成されたようです。天正3年（1575）、織田信長より大野郡の3分の2を与えられた金森長近は、亀山に大野城を築き、東麓に居館を構え、その居館の東側に東西・南北それぞれ六条の通路を持つ矩形の城下町を建設しました。これが、現在の大野市街地の原形となりました。

寛永元年（1624）、福井藩の分割により大野藩が成立すると、当地区は大野藩領となりました。

大野藩の藩庁は大野城の東麓に建ち、周囲には家臣団の居住地が設けられ、それをさらに町人地が囲み、最も外縁を寺町としました。町人地は職業ごとの集住が行われており、三番町の石灯籠小路より北は「桶屋町」、七間町と六間町の間は「魚町」、六間町と大鋸町の間を「大工町」、四番町の八間町と七間町の間を「鍛冶町」と呼びました。

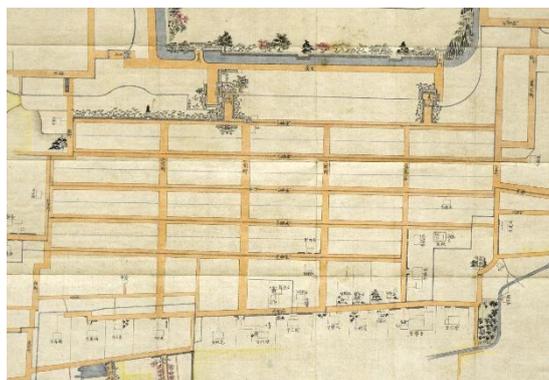


写真7 大野町絵図（安政5年以降・部分）

(2) 下庄地区

①地勢

地域のほとんどは平坦部で、北部に標高約600mの禪師王子連山があります。この山地のどの峰からも白山が一望できることから、おおの遺産「行人岩」など、山岳宗教に結びつく遺跡が所々で確認されています。当地区で合流する4つの河川、九頭竜川・真名川・清滝川・赤根川は、農業灌漑用水の重要な取水源となっています。

②地区名の由来

地区名の由来は、明治22年(1889)の町村制の施行に伴い、中野村のほか16村の合併により誕生した「下庄村」によります。『和名類聚抄』(承平年間(931~938)編纂)にある「資母郷」がこの地区に該当すると考えられており、大野盆地の河川の下流域としての立地環境による認識と呼称は古くからあったようです。

③略史

大野盆地の低位を流れる赤根川は、肥沃な泥土を多く含んだ流れであったことから、流域には早い時代から農耕を主体にした集落があったようです。中世には中夾(中挾)と庄林が牛原庄に含まれ、醍醐寺の荘園の一部となりました。

寛永元年(1624)、福井藩の分割により大野藩が成立すると、当地区の全域が大野藩となりましたが、天和2年(1682)、土井氏が入封した際に、大矢戸・西大月・東大月と小矢戸の一部が幕府領となりました。享保5年(1720)に大矢戸と東大月は鯖江藩となりましたが、文久2年(1862)に幕府領に戻りました。

大野盆地の下流域にあることから土壌が肥沃で、豊かな農業生産物が収穫されていました。江戸時代に書かれた『大野往来』に記録されている各集落の大野藩への献上品は次のとおりです。

中野の瓜・太郎丸村(中野村の枝村)の茄子・中挾のエビ・横枕の鮎とタバコ・新在家の鮭・中津川のカジカ・庄林の焼米・西市のウグイ・中荒井のカブ・小矢戸の山椒・中保の小麦・友江のナズナ・菖蒲池の菱・太田のキュウリ・堂本の芋・下中野のネギ



写真8 行人岩

(3) 乾側地区

①地勢

北・西・南の三方を山に囲まれ、その山麓に集落が形成されてきました。

②地区名の由来

地区名の由来は、明治22年(1889)の町村制の施行に伴い、牛ヶ原ほか5村の合併により誕生した「乾側村」によります。これは、当地が大野地区から戌亥(北西)の側にあることから名付けられました。

③略史

中央の平野部は大野盆地の中でも低位の湿地帯であり、水稻耕作の容易な地域であったと考えられ、

飯降山より北に延びる支脈上や山麓には、数多くの古墳が集中して造られています。平安時代になると醍醐寺円光院領として牛原荘がおかれしました。荘園は現在の大字牛ヶ原よりも広域で、当地区の他、大野地区、下庄地区、上庄地区の一部にも及んでいました。

寛永元年（1624）、福井藩の分割により大野藩が成立すると、当地区は大野藩領となりました。

坂戸・尾永見・大門の三集落共同の鎮守である三社神社で伝えられている市指定無形民俗文化財「雨乞い踊り」は、江戸時代、ひと夏に3回、この踊りが開催されれば、その年の年貢が減額されたと言われており、大野藩にとっても注目すべき祭礼だったことがわかります。

江戸時代に書かれた『大野往来』には大野藩への献上品として山の産物が多く記録されています。

犬山の犬栗・牛ヶ原の蕨・丁の松茸・矢のフナ・尾永見のタケノコ・上大門の栃餅・坂戸の蕨・下大門のエノキダケ



写真9 三社神社

(4) 小山地区

①地勢

大小の高山丘陵に囲まれ、そのうち飯降山（884.3m）は通称を「おたけさん」（大岳・御岳）といい、山岳信仰の山としてあがめられてきました。地区の南方山地を源とする赤根川は地区の中央を北流し、流域集落の灌漑用水の水源として重要な役割を果たしています。

②地区名の由来

地区名の由来は、明治22年（1889）の町村制の施行に伴い、下舌のほか11村の合併により誕生した「小山村」によります。『和名類聚抄』（承平年間（931～938）編纂）にある「大山」をこの地区に該当させる説がありますが詳細は不明で、直接は平安末期から戦国時代にかけておかれていた小山荘の荘名から採られました。

③略史

昭和49年（1974）に発掘された右近次郎遺跡は、縄文中期から晩期にかけての複合遺跡であり、確認されている縄文時代の遺構としては大野市内で最大です。また、比較的緩やかな流れであった赤根川流域を中心に多くの古墳が確認されています。阿難祖地頭方・阿難祖領家の大字名は、鎌倉時代中期から後期にかけて行われた「下地中分」（地頭と荘園領主による荘園の分割統治）の痕跡を留めています。

寛永元年（1624）、福井藩の分割により大野藩が成立すると、当地区は大野藩領となりました。

幕末期、地区中央部の新田野で大野藩によって洋式砲術の大演習が行われ、藩主は上舌の茶臼山山頂で観閲しました。

江戸時代に書かれた『大野往来』に記録されている各集落の大野藩への献上品は次のとおりです。

鍬掛の小豆・深井のツクシ・飯降のシメジ・上荒井の漆・右近次郎のゴボウ・上舌と下舌の稗・下黒谷の蕎麦・阿難祖地頭方のもち米・阿難祖領家の木綿



写真 10 右近次郎遺跡

(5) 上庄地区

① 地勢

地区内を、真名川と清滝川の2河川が北流しています。真名川は、山間部から平地部に移行する五條方から下流域にかけて広大な扇状地を形成しています。清滝川も同様の扇状地を形成しており、その扇端部に当たる大野地区では、地下に浸透した水が多量の伏流水となって湧出し、生活用水と灌漑用水として利用されています。

② 地区名の由来

地区名の由来は、明治22年(1889)の町村制の施行に伴い、稲郷村のほか25村の合併により誕生した「上庄村」によります。『和名類聚抄』(承平年間(931~938)編纂)にある「加美郷」がこの地区に該当すると考えられており、大野盆地の河川の上流域としての立地環境による認識や呼称は古くからあったようです。

③ 略史

佐開をはじめ、地区内には多くの縄文遺跡が確認されています。また、北御門古墳は朝倉時代に大野郡司となる朝倉光玖によって、経塚に転用されたと言われています。森政地頭と森政領家、木本頭と木本領家、平沢地頭と平沢領家の地名は、鎌倉時代中期から後期にかけて行われた「下地中分」(地頭と荘園領主による荘園の分割統治)の痕跡を留めています。また、かつては佐開も地頭方と領家方に分かれていたことが史料中に出てきます。

寛永元年(1624)の福井藩の分割から廃藩置県までの藩領支配の経緯は表2のとおりです。

表2 藩領支配の経緯(上庄地区)

年代 村名	寛永元年 (1624)	寛永12年 (1635)	寛永14年 (1637)	貞享3年 (1686)	元禄5年 (1692)	享保5年 (1720)	文久2年 (1862)
東中 下据 中据 五條方 佐開 上若生子 下若生子	大野藩	→	→	→	→	→	→

木本地頭 森山 森政領家 御給 東山 吉 平沢領家 平沢地頭	木本藩	幕府領	福井藩	幕府領	郡上藩	→	→
木本領家 稲郷 上据 今井 森政地頭	木本藩	幕府領	福井藩	幕府領	→	鯖江藩	幕府領
宝慶寺 西山 野中 開発 友兼 北御門 下郷 猪島 医王寺	木本藩	幕府領	福井藩	幕府領	→	→	→



写真 11 北御門古墳

(6) 富田地区

①地勢

荒島岳山麓より北西方向に傾斜の緩やかな放射状の台地が地区中央まで広がり、塚原野・栗原野の二つの台地を形成しています。

塚原野は、経ヶ岳火山噴出物と泥流の末端部分が堆積してできた地形とされ、南北 3.4km、東西 2.8km にも及ぶ広大な地域です。所々に点在する大小無数の塚により「千塚野」とも呼ばれ、江戸時代には塚の間の湿地にある湧水を利用して開田が行われました。昭和 20 年（1945）、食糧事情の悪化と復員者の対応措置として政府によって緊急開拓事業実施要領が施行され、同年 11 月から入植が行われました。昭和 22 年（1947）10 月には、昭和天皇による視察が行われています。

②地区名の由来

地区名の由来は、明治 22 年（1889）の町村制の施行に伴い、上野ほか 15 村の合併により誕生した「富田村」によります。これは、当地が九頭竜川と真名川に挟まれた島地であることから、古くから「飛田」と称されていたことから名付けられました。

③略史

富田の地名の初見は建武2年(1335)の『後醍醐天皇綸旨写』にある「越前国富田庄」で、他の史料から、その荘域は南は下唯野・蕨生から北は森目にかけて真名川・九頭竜川に挟まれた地域を指すものと思われます。

明治35年に発行された『越前国名蹟考』では、「又ハ抱庄トモ云」と紹介しています。これは、建久4年(1193)、曾我兄弟が源頼朝を襲撃した時に、寝所に控えていた御所五郎丸が曾我時致を抱きとめて頼朝を危難から救ったことの恩賞として、この地一帯を拝領したという言い伝えに因むもので、土打には御所五郎丸の墓と伝わる墓石が立っています。

寛永元年(1624)の福井藩の分割から廃藩置県までの藩領支配の経緯は表3のとおりです。

表3 藩領支配の経緯(富田地区)

年代	寛永元年 (1624)	寛永12年 (1635)	寛永14年 (1637)	正保2年 (1645)	天和2年 (1682)	元禄4年 (1691)	元禄5年 (1692)	享保6年 (1721)
木落 蕨生 下唯野 七板	木本藩	幕府領	→	→	→	勝山藩	→	→
土打 田野 富嶋	木本藩	幕府領	福井藩	松岡藩	→	→	→	福井藩
上野	木本藩	幕府領	→	→	→	→	郡上藩	→
森目	木本藩	幕府領	→	→	→	→	→	→
井ノ口 川嶋 新河原 土布子 下麻生嶋	大野藩	→	→	→	幕府領	→	郡上藩	→
上麻生嶋	大野藩	→	→	→	幕府領	→	→	→



写真12 御所五郎丸の墓

(7) 坂谷地区

①地勢

三方を山に囲まれた丘陵地帯は起伏に富んでいます。約100万年前に起きた経ヶ岳噴火により発生した火砕泥流によって運ばれた溶岩の巨大なブロックが、現在も地区内に点在しています。また、六呂師高原は約1万年前に起きた経ヶ岳山頂部の崩壊によって形成されました。

②地区名の由来

地区名の由来は、明治22年(1889)の町村制の施行に伴い、伏石ほか17村の合併により誕生した「坂谷村」によります。これは、戦国時代の「坂谷村」や江戸時代の「坂谷郷」に因んだものです。表

記が「^{きかだに}阪谷」に変更された時期は不明ですが、明治 20 年（1887）から 30 年（1897）にかけて公文書に登場します。

③略史

^{ろくろし}六呂師は、元は^{ろくろ}轆轤師と表記されており、宗教都市を形成していた^{へいせん}平泉寺（勝山市）の職工の一つである^{きじし}木地師にゆかりがある地名と考えられています。この他にも、『福井縣大野郡阪谷^{ごみ}五箇村誌』では、平泉寺に関わると思われる地名と坊名が多く挙げられています。また、慶長 16 年（1611）頃に^{おぐろみ}小黒見近辺で金山が発見されると、^{きんざん}鉦山師によって鉦山町が形成されました。今も大字名「^{きんざん}金山」としてその名を留めています。

面積の 3 分の 2 が山林である当地区では、江戸時代を通じて、山境や入会権に関する争論が多発しました。^{きんざん}金山と近村 6 ケ村との出入の争論は江戸の評定所に訴えるまでに発展しましたし、^{まつまる}六呂師・^{ふんどん}松丸・^{おおやだに}不動堂・大矢谷 4 ケ村の地境争論は江戸時代を通して争われていました。

寛永元年（1624）の福井藩の分割から廃藩置県までの藩領支配の経緯は表 4 のとおりです。

表 4 藩領支配の経緯（阪谷地区）

年代 村名	寛永元年 (1624)	寛永 12 年 (1635)	寛永 14 年 (1637)	正保元年 (1644)	正保 2 年 (1645)	貞享 3 年 (1686)	元禄 4 年 (1691)	元禄 5 年 (1692)	享保 6 年 (1721)
伏石 八町 小黒見	木本藩	幕府領	福井藩	→	松岡藩	→	→	→	福井藩
柿ヶ嶋 橋爪 蓑道 落合 堂嶋 金山	木本藩	幕府領	福井藩	→	→	幕府領	勝山藩	→	→
御領	木本藩	幕府領	福井藩	→	→	幕府領	勝山藩	→	→
	福井藩	→	→	→	→	幕府領	→	郡上藩	→
松丸 石谷	勝山藩	→	→	幕府領	→	→	→	郡上藩	→
森本 萩ヶ野 花房 不動堂 大月 六呂師	勝山藩	→	→	幕府領	→	→	勝山藩	→	→



写真 13 金山町他六ヶ村山論裁許絵図（享保 2 年（1717））

(8) ^{こか}五箇地区

①地勢

白山(2,702m)の支脈が連なり、三ノ峰(2,128m)より南走する二ノ峰(1,962m)や一ノ峰(1,839m)、願教寺山(1,690m)など、1,600m以上の高峰が連なっています。また、南西には日本百名山の荒島岳が上庄地区と和泉地区の境になっています。

②地区名の由来

地区名の由来は、明治22年(1889)の町村制の施行に伴い、上打波ほか4村の合併により誕生した「五箇村」によります。これは、江戸時代の「五ヶ村」に因んだもので、上打波・下打波・東勝原・西勝原・仏原の5村の総称です。

③略史

加越国境の尾根づたいに白山参詣登山道が通り、三ノ峰で石徹白登山道と交差しています。地区内には「刈込池」や「鳩ヶ湯」、市指定天然記念物「桃木峠の大杉」、県指定無形民俗文化財「神子踊」、県指定天然記念物「白山神社のカツラ」など、白山信仰にゆかりを持つ文化財が多くあり、当地区を特徴付けています。

慶長5年(1600)に結城秀康が越前一国を与えられてから福井藩領となりましたが、貞享3年(1686)に幕府領となり、元禄5年(1692)以降は郡上藩領となりました。

江戸時代、領内の米が他地に流出することを防ぐために、大野藩は西勝原を含めた3ヶ所に「口留」と呼ばれる番所を設けていました。西勝原は大野藩ではなく郡上藩でしたが、慣例により設置していたようです。江戸時代を通して旅人の往来や米の流出を取り締まっていましたが、大野藩領である箱ヶ瀬や大納、大野藩経営の面谷銅山への飯米の移送は許可していたため、口留番所としての取り締まりの徹底は困難だったようです。



写真14 県指定天然記念物「白山神社のカツラ」

いずみ (9)和泉地区

①地勢

九頭竜川の上流に位置し、周囲を高山に囲まれています。面谷をはじめ、地区内の至る所で鉱山が開発されていました。また、古くから化石が産出することで有名で、大字「貝皿」は蜆貝の化石に由来するとされており、江戸時代には既に室内の装飾用として貝の化石が採取されていたようです。明治になると、国内で初めてジュラ紀のアンモナイトの化石が発見されました。

②地区名の由来

明治22年(1889)の町村制の施行に伴い、東市布ほか11村が合併した上穴馬村と、朝日ほか14村が合併した下穴馬村が誕生しましたが、明治29年(1896)、下穴馬村から石徹白村が分離独立しました。

その後、昭和 31 年（1956）、上穴馬村と下穴馬村が合併して和泉村が誕生しました。「和泉」の地区名は合併両村の和の祈念と、九頭竜川をはじめとする諸河川の水源地を意味する泉を合わせたものです。

③略史

平安末期、源平の戦を逃れた源義平（頼朝の長兄）が朝日に落ち延び、その際に遺児に残したという「青葉の笛」が今も伝えられています。また、石山本願寺が織田信長と争った際、困窮した本願寺法主顕如への救援として物品を届けたことから、穴馬の門徒が直参（九ヶ同行・西本願寺系）になったと言われています。一方、徹底抗戦を続けた教如の救援のために参戦した穴馬門徒も直参（六ヶ八ヶ同行・東本願寺系）になりました。

寛永元年（1624）に福井藩が分割すると、箱ヶ瀬・持穴の 2ヶ村は大野藩となりました。米俵は木本藩となり、寛永 12 年（1635）に福井藩に戻りました。貞享 3 年（1686）、米俵・東市布・上半原・下半原・荷暮・伊勢・久沢・大谷・野尻の 9ヶ村は幕府領となり、元禄 5 年（1692）に郡上藩となりました。

箱ヶ瀬の枝村だった面谷では良質の銅が採掘され、宝永 5 年から正徳 5 年（1707～15）にかけて大坂に運ばれた銅の中で、面谷の銅の輸送量は全国で第 11 位～12 位だったと記録されています。幕末期の大野藩の藩政改革では、重要な資金源となりました。



写真 15 青葉の笛

(10) 西谷地区

①地勢

能郷白山をはじめとする山岳地帯に位置し、地区内を真名川の源流に当たる笹生川・雲川・温見川が流れています。耕作地は非常に限られていたことから、鉱山業や紙すきなどの産業が行われていました。また、漢方薬として重宝された黄蓮は、高冷地である当地区の気候に適していたことから盛んに栽培され、換金作物として重要な収入源となっていました。

②地区名の由来

地区名の由来は、明治 22 年（1889）の町村制の施行に伴い、中島ほか 10 村の合併により誕生した「西谷村」によります。「西谷」の名は、九頭竜川上流域に位置する和泉地区を「南山中東の谷」と呼んだのに対し、真名川流域に位置する当地区を「南山中西の谷」と呼んだことに由来します。

③略史

地名の初出は嘉元 4 年（1306）の『永嘉門院瑞子女王御使家知申状并昭慶門院憲子内親王御領目録案』に載る「西谷庄」で、同書などから、当地区の多くは小山庄の一部として京都の安楽寿院領に編成されていたことがわかります。

寛永元年（1624）の福井藩の分割から廃藩置県までの藩領支配の経緯は表 5 のとおりです。

表5 藩領支配の経緯（西谷地区）

年代	寛永元年 (1624)	貞享3年 (1686)	元禄5年 (1692)
村名			
中島	大野藩	→	→
上笹又			
下笹又			
小沢			
黒当戸			
下秋生			
本戸			
上秋生			
巢原	福井藩	幕府領	郡上藩
熊河	福井藩	幕府領	→
温見			

美濃街道の「西道」と「中道」が通る当地区は、越前と美濃をつなぐ主要地として、古くから多くの往来があり、江戸時代には、下笹又に口留番所が設けられ、通行人や米の流通を監視していました。

幕末の動乱期、武田耕雲斎が率いる水戸浪士「水戸天狗党」の一行は、美濃との国境にある蠅帽子峠を通過して越前国に入り、笹又峠で大野藩兵と対峙しました。この時、大野藩は水戸天狗党の休息場所を奪うために、自領である上秋生など7ヶ村を焼き払いました。

江戸時代に書かれた『大野往来』に記録されている各集落の大野藩への献上品は次のとおりです。

笹又の夕顔・中島の茗荷・小沢の鳴・秋生の厚紙・若生子と黒当戸の芋

昭和40年(1965)9月に地区を襲った風水害による被災と真名川ダム建設による集落の水没のため、全住民の集団離村が決定され、昭和45年(1970)に大野市と合併しました。



写真16 笹又峠の題目塔（南無妙法蓮華經と刻まれた鎮魂を目的とする供養塔）

3. 各地区の世帯数・人口の推移

表6 各地区の世帯数・人口の推移

	明治5年 *1 (1872)	明治44年 *2 (1911)	大正9年 *3 (1920)	昭和5年 *3 (1930)	昭和30年 *4 (1955)
大野地区	2,083 戸 9,052 人	1,885 戸 10,136 人	2,385 戸 10,824 人	2,594 戸 11,835 人	3,825 戸 17,505 人
しもしょう 下庄地区	752 戸 3,936 人	773 戸 4,638 人	849 戸 4,410 人	911 戸 4,911 人	1287 戸 7,024 人
いぬいかわ 乾側地区	322 戸 1,834 人	296 戸 1,938 人	279 戸 1,543 人	261 戸 1,448 人	280 戸 1,565 人
おやま 小山地区	363 戸 2,072 人	332 戸 2,296 人	327 戸 1,835 人	311 戸 1,787 人	342 戸 1,980 人

かみしよう 上庄地区	1,320 戸 6,507 人	1,193 戸 6,522 人	1,166 戸 6,230 人	1,113 戸 5,963 人	1,177 戸 6,766 人
とみた 富田地区	752 戸 3,994 人	705 戸 4,040 人	750 戸 3,817 人	736 戸 3,958 人	776 戸 4,476 人
きかたに 阪谷地区	796 戸 3,820 人	704 戸 3,933 人	691 戸 3,354 人	660 戸 3,340 人	657 戸 3,567 人
ごか 五箇地区	295 戸 2,008 人	292 戸 2,039 人	295 戸 1,829 人	286 戸 1,549 人	227 戸 1,114 人
いずみ 和泉地区	579 戸 3,580 人	863 戸 5,594 人	915 戸 5,071 人	— 3,916 人	569 戸 ^{*5} 2,859 人 ^{*5}
にしたに 西谷地区	351 戸 2,268 人	410 戸 2,680 人	519 戸 2,638 人	468 戸 2,534 人	585 戸 3,435 人

*1『足羽県地理誌』 *2『大野郡誌』 *3「国政調査概要」 *4「福井大学学芸学部紀要第三部」 *5 和泉村広報誌「むらしるべ」

第4節 社会環境

1. 交通

(1) 公共交通

JR越美北線（九頭竜線）が国道 158 号と並行して走り、越前花堂駅（福井市）からはハピラインふくい線を経由し福井駅まで乗り入れています。

大野市街地中心部をまちなか循環バスが運行しています。また、大野市街地と周辺地域を結ぶ乗合タクシーや、大野市街地と山間部を結ぶ市営バスを運行している他、大野市内と大野市外を結ぶ広域路線バスが運行しており、市民の重要な交通機関となっています。

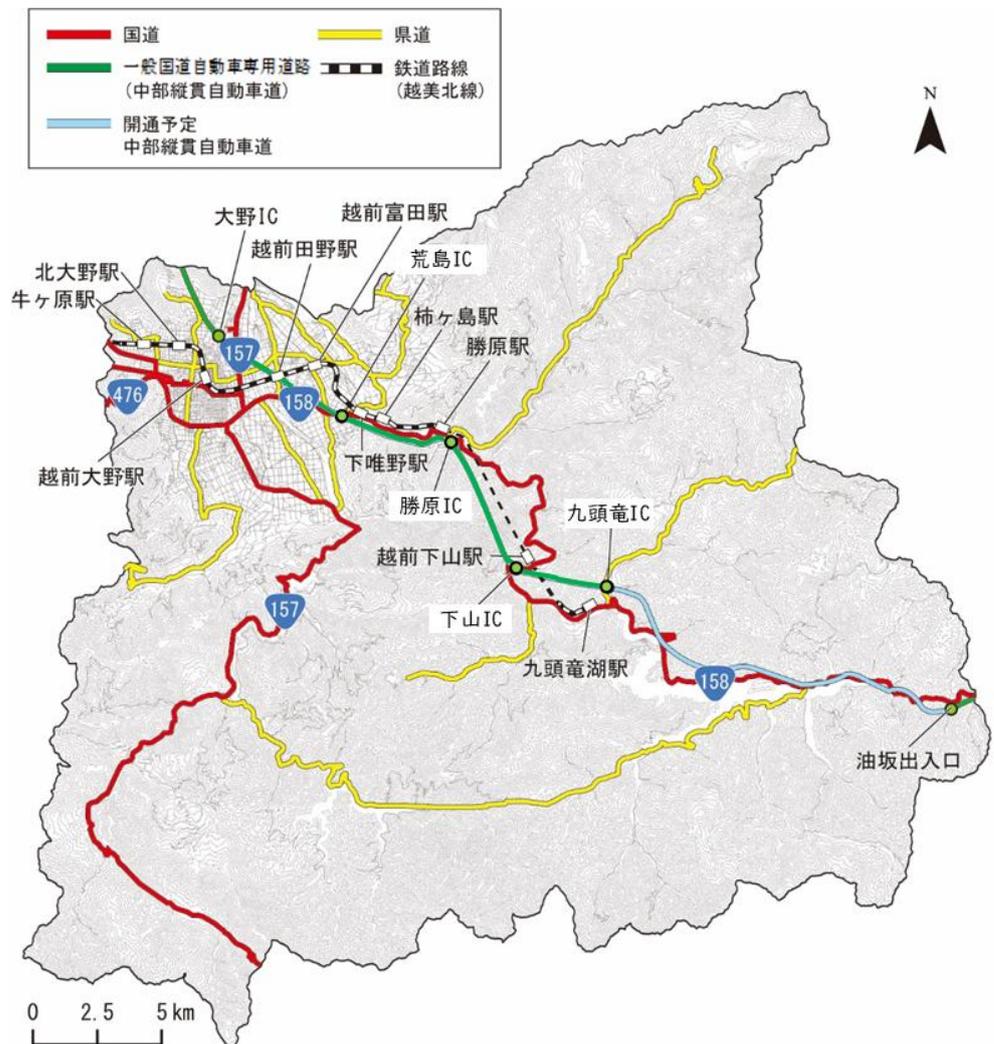


図 20 大野市の主要幹線交通網
(国土数値情報「緊急輸送道路」、「鉄道」、背景図に基盤地図情報を使用)

(2) 自動車道

国道 158 号は大野市内を東西に走り、東海北陸自動車道に連絡しています。また、国道 157 号は大野市内を南北に走り、一般国道自動車専用道路である中部縦貫自動車道に連絡しています。中部縦貫自動車道

車道は、令和7年（2025）4月現在、九頭竜^{くずりゅう}ICまで開通しています。今後、油坂出入口（仮称）まで開通することで、特に名古屋などの中京圏へのアクセスが向上し、本市を訪れる人々のさらなる増加や安定した物流ルート^{物流ルート}の確保につながります。これにより、多方面の市町との交流と経済交流の発展が期待されています。この他にも国道364号、国道418号、国道476号があります。なお、国道364号は国道158号と、国道418号は国道157号と、大野市内では重複して供用されています。

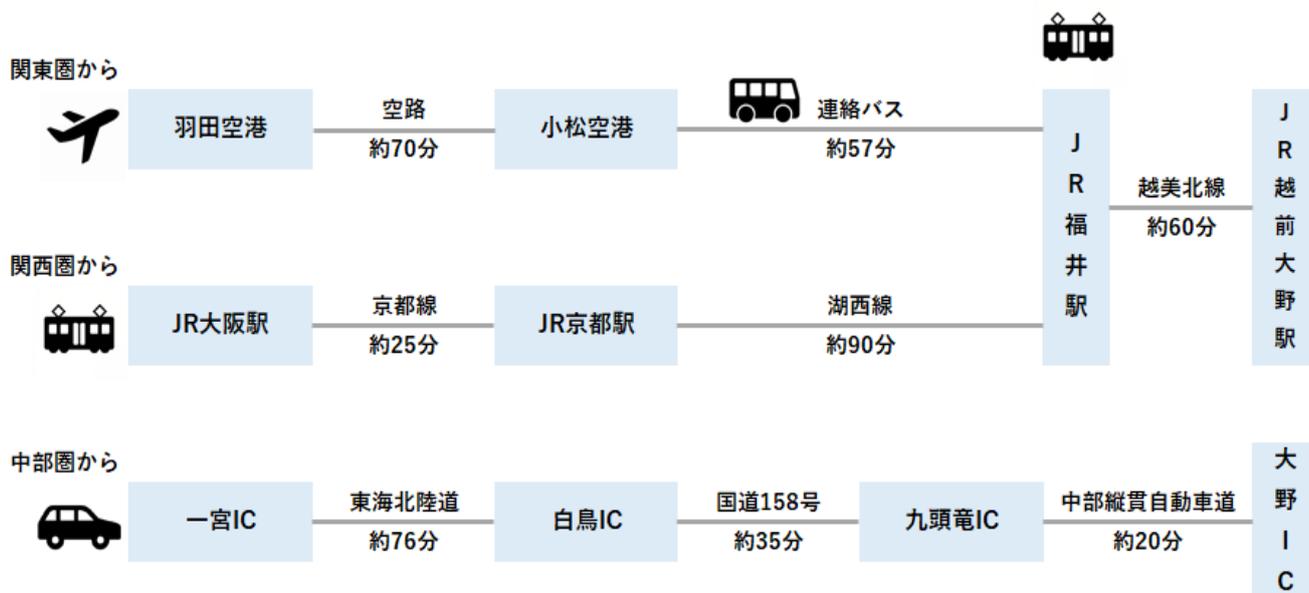


図21 大野市までのアクセス図 ※各エリアからの最短ルートを示しています。

本市は福井県内で最も広い面積を有しており、市内各所に多くの文化財を有しています。本市の文化財の活用を積極的に進めていく上でも、本市までの交通アクセスと市内交通の整備に努めていく必要があります。

2. 産業

令和2年（2020）国勢調査や2020年農林業センサスなどの統計調査結果に基づく産業の就業別人口比からみた本市の産業構造は、第1次産業約7%、第2次産業約33%、第3次産業約60%となっています。

このうち第1次産業の中心である農家は、令和2年（2020）には1,174人で、平成27年（2015）からの5年間で約20%減少しています。次に第2次産業では、従業員数は令和2年（2020）で5,496名、平成27年からの間で約1%の減少となっています。また、第3次産業では商店数は令和3年（2021）には347店舗あり、平成26年（2014）からの7年間で約4%減少しています。

本市で古くから親しまれ、受け継がれてきたものとして、サトイモやナスなどの伝統野菜、豊富な地下水を利用した醸造業などがあります。

表7 産業別就業者の構成（出典：「大野市勢要覧 Ver.2014、2018 資料編（最新版）」より引用）

産業別就業者の構成（令和2年 国勢調査）

	人数	割合
第1次産業		
農業	1,174人	6.92%
林業	71人	0.42%
漁業	5人	0.03%
鉱業、採石業、砂利採取業	6人	0.04%
第2次産業		
建設業	2,229人	13.14%
製造業	3,267人	19.26%
第3次産業		
電気・ガス・熱供給・水道業	147人	0.87%
情報通信業	151人	0.89%
運輸業・郵便業	470人	2.77%
卸売業、小売業	2,159人	12.73%
金融業、保険業	315人	1.86%
不動産業、物品賃借業	105人	0.62%
学術研究、専門・技術サービス業	395人	2.33%
宿泊業、飲食サービス業	614人	3.62%
生活関連サービス業、娯楽業	534人	3.15%
教育、学習支援業	761人	4.49%
医療、福祉	2,554人	15.06%
複合サービス事業	283人	1.67%
サービス業	859人	5.06%
公務	582人	3.43%
分類不能	283人	1.67%
総数	16,964人	100.00%

産業別事業所数・従業員数（令和3年 経済センサス・活動調査）

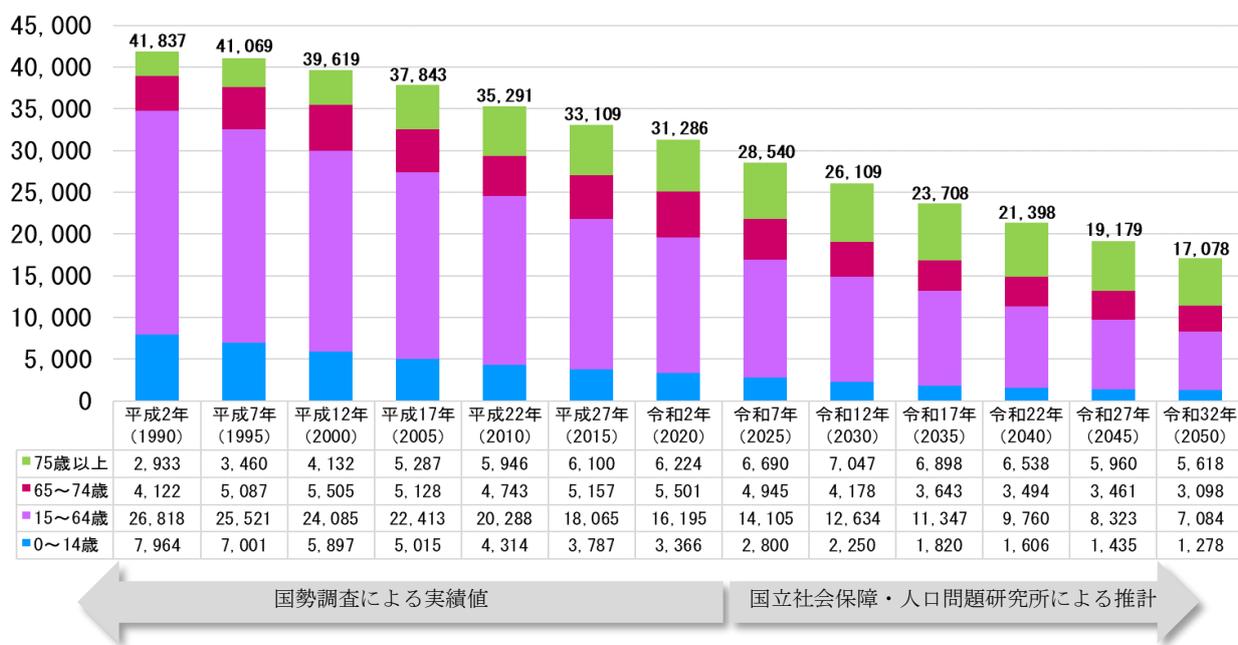
	件	人
第1次産業		
農業、林業、漁業	53件	789人
第2次産業		
建設業	264件	1,605人
製造業	185件	2,796人
第3次産業		
電気・ガス・熱供給・水道業	3件	107人
情報通信業	6件	18人
運輸業・郵便業	24件	252人
卸売業、小売業	391件	2,232人
金融業、保険業	28件	254人
不動産業、物品賃借業	33件	131人
学術研究、専門・技術サービス業	48件	246人
宿泊業、飲食サービス業	203件	681人
生活関連サービス業、娯楽業	162件	549人
教育、学習支援業	39件	267人
医療、福祉	147件	1,707人
複合サービス業	15件	145人
サービス業	136件	703人
総数	1,737件	12,482人

3. 人口

令和2年（2020）の国勢調査によれば、本市の総人口は31,286人で、5年前の総人口33,109人と比較し1,823人減少（約5.5%減）しています。これは、出生よりも死亡人口が多い自然的要因と、転入よりも転出が多い社会的要因の両方の要因が考えられます。

本市の人口減少は全国的な傾向よりも速いペースで進んでおり、国立社会保障・人口問題研究所の「日本の地域別将来推計人口（令和5年（2023）推計）」によれば、将来推計人口は令和32年（2050）には17,078人となり、令和2年（2020）に比べ14,208人減少すると予測されています。

人口減少による文化財保護の担い手や後継者の不足などが懸念されることから、新たな担い手などの確保が喫緊の課題となっています。



【出典】総務省「国勢調査」、国立社会保障・人口問題研究所（社人研）「日本の地域別将来推計人口」
 【追記】令和2年（2020）までは「国勢調査」のデータに基づく実績値、令和7年（2025）以降は「国立社会保障・人口問題研究所」のデータに基づく推計値。

図 22 人口推移（人）

4. 土地利用

(1) 土地利用の概況

本市は福井県東部に位置し、加越山地・越美山地・越前中央山地と、南北約 9 km、東西約 7 km の大野盆地より形成されており、面積の約 87% が山林です。

天正 3 年（1575）から織田信長の家臣金森長近が整備した城下町が、現在に続く大野市中心市街地の骨格となっています。

城下町は、明治維新後、大野郡庁と裁判所が設けられ、地域の中心地として、養蚕・製糸・刻みたばこ・羽二重などの生産により活況を呈し、政治・経済の中核として発展を見ることとなります。高度経済成長期の昭和 40 年代になると、旧城下町区域を中心としたコンパクトな大野市街地は、南部と東部を中心に拡大しました。その後、国道 157 号の整備や JR 越前大野駅開駅（当時国鉄）など広域的な交通網の整備によって大野市街地はさらに拡大しました。

大野市街地は奥越地域の中心都市として、機能的かつ市民にとって良好な都市環境が創出されるよう、各種都市機能の集積する拠点を目指した都市づくりに努めています。「第六次大野市総合計画」では、令和 12 年度（2030 年度）までに、中部縦貫自動車道県内全線開通などの社会基盤の整備に伴い土地利用にも変化が予測されますが、効率的かつ安全で安心な、自然環境に配慮した土地利用を図ることとしています。

その基本方針は、①自然災害に対応する土地利用、②健全な水循環の維持と回復に向けた土地利用、③自然環境と開発が調和した土地利用の 3 点とします。

(2) 主な法規制

大野盆地では、大野市街地を除く多くの地域が農業振興地域に指定されています。また、山林の多くが保安林に指定されており、国有林も小山地区・上庄地区・阪谷地区・五箇地区・和泉地区・西谷地区

の一部に分布しています。

市内の自然公園としては、白山国立公園と奥越高原県立自然公園があり、公園の範囲は特別地域と普通地域に細分されています。白山国立公園は4県からなる白山山系の山岳公園であり、本市は五箇地区の一部が特別保護地区に指定されています。奥越高原県立自然公園は勝山市にまたがる白山山系の山岳公園で、^{かみしょう}上庄地区・^{きかだに}阪谷地区・^{いずみ}五箇地区・^{にしたに}和泉地区・西谷地区の一部が特別地域もしくは普通地域に指定されています。以上のように、山地では地形や動植物の生息環境、景観の保全が図られ、良好な自然環境が維持されています。

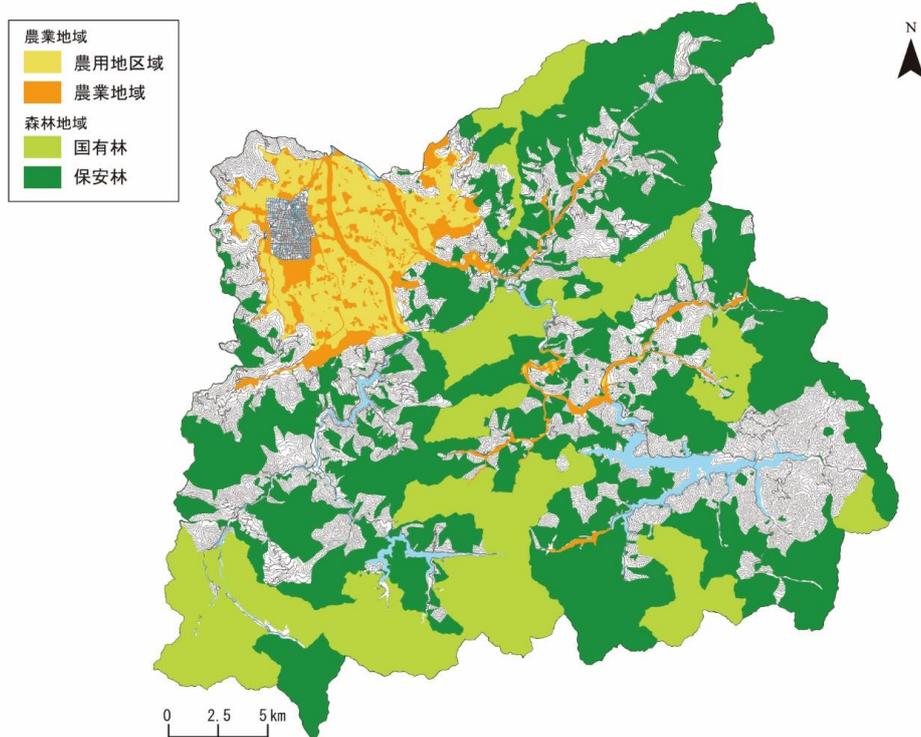


図 23 農業地域・森林地域（国土数値情報「農業地域」「森林地域」、基盤地図情報を使用）

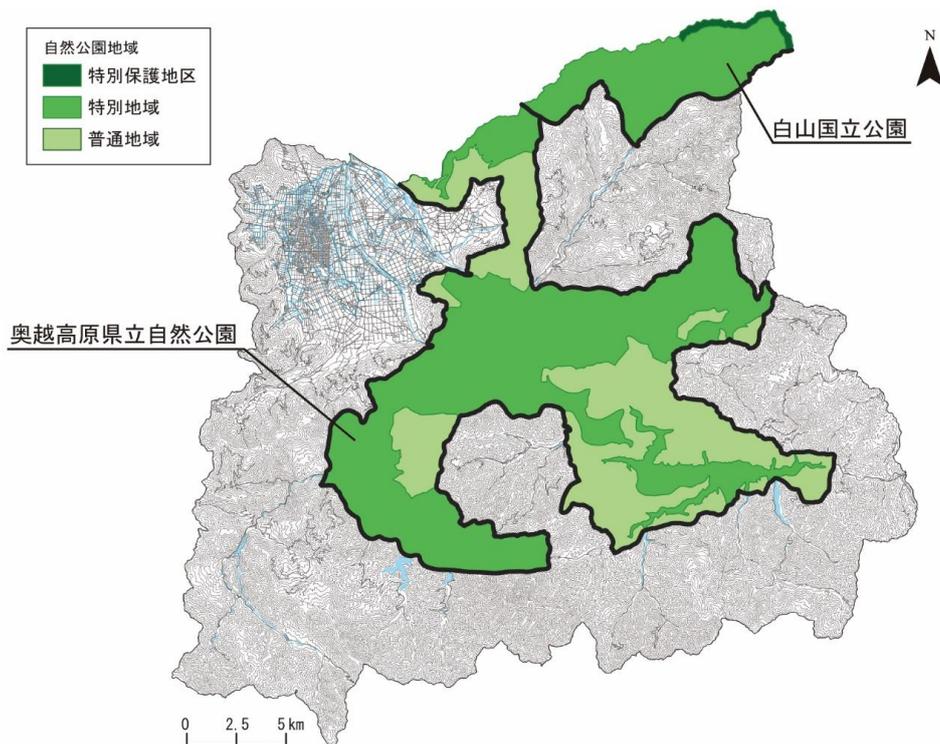


図 24 自然公園地域（国土数値情報「自然公園地域」基盤地図情報を使用）